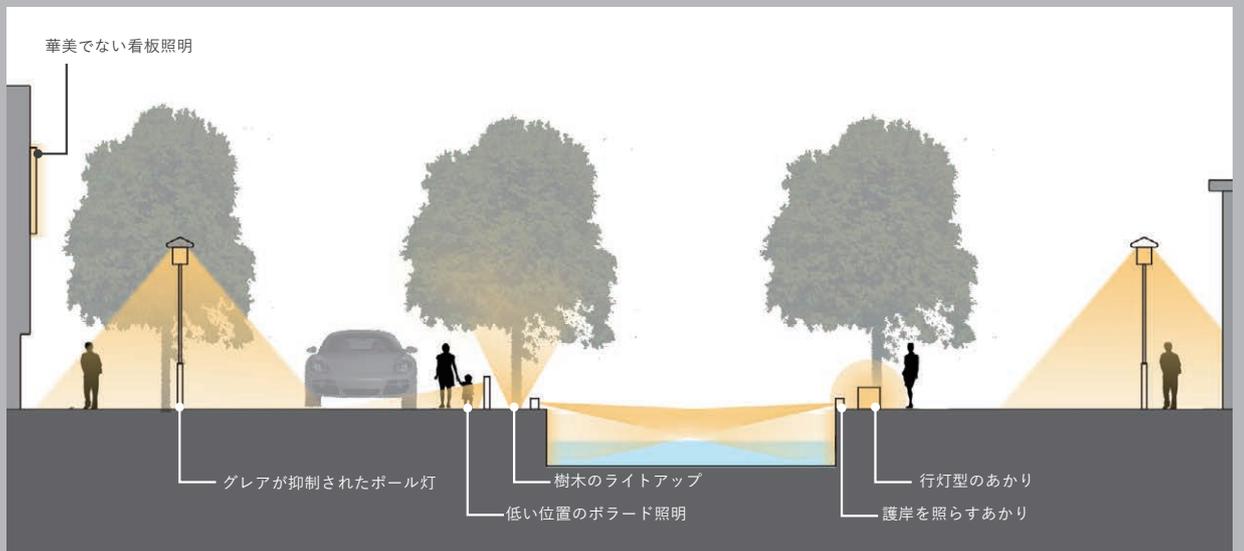
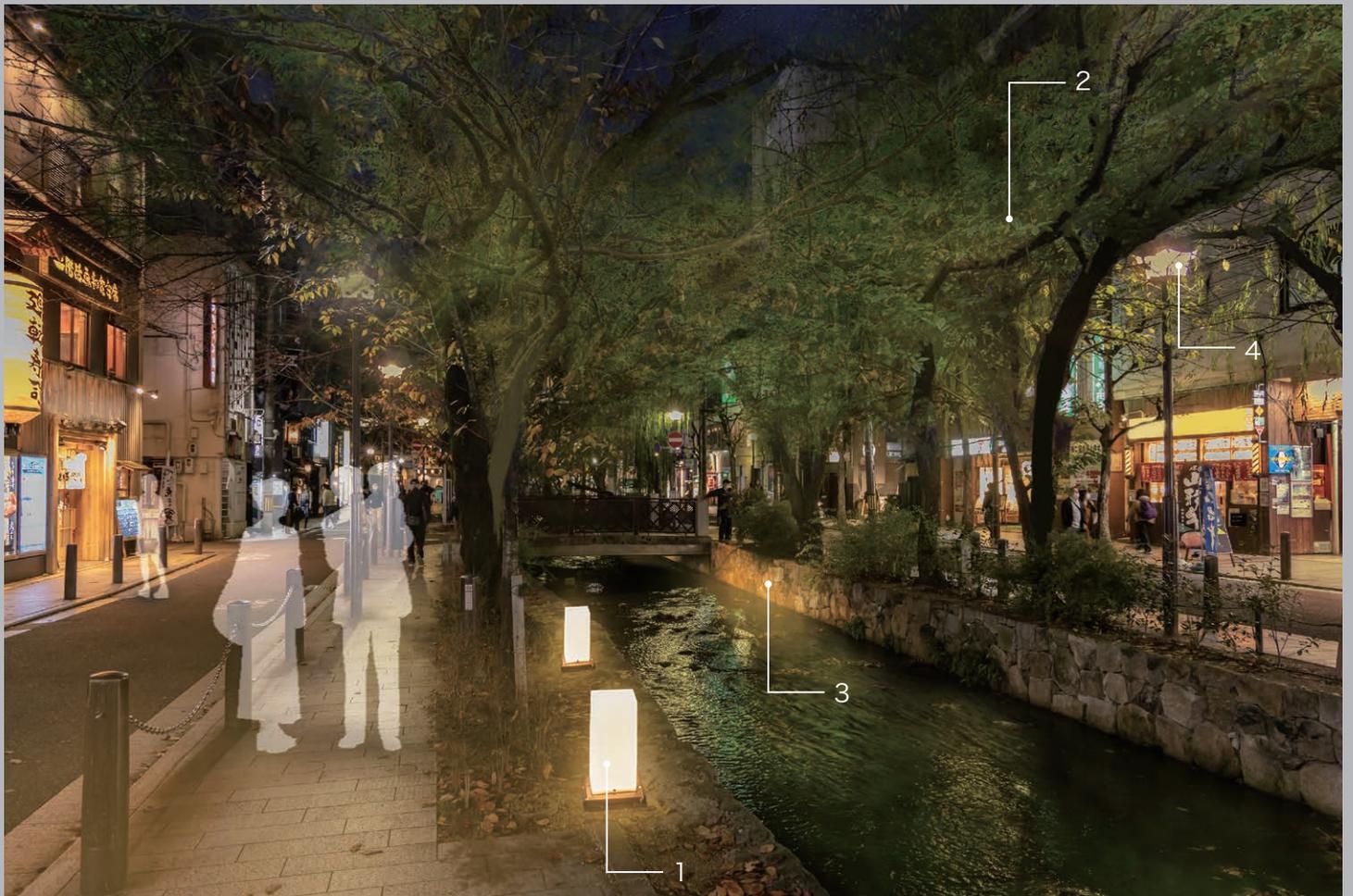


高瀬川沿い — 京都の「水辺」 —

高瀬川沿いのように、豊かな緑や水辺をもつ地域では、夜もそれを活かすことで昼とは違った魅力を演出できる。飲食店等の多いにぎわいのある地域では、看板や街灯の色味を統一すると調和した雰囲気になる。静かなエリアであっても、歩行者のためのあかりなどがあると安心・安全に過ごせる。



断面のイメージ



5. 川岸に面した店舗やビルでは、水面への映り込みを意識することで、室内のあたたかい雰囲気をまちに伝えることが可能となる。



テラス席のない店舗でも、窓明かりや壁面の明かりが映る。

1. 目線よりも低い位置で柔らかい光を発する行灯型の照明器具。歩道に沿って足元を照らすことで人にやさしい歩行空間となる。/ 2. 樹木のライトアップ。夜間にも豊かな緑が感じられる。水面への映り込みによって、明るさ感も増す。/ 3. 川の護岸を照らす光。水面のゆらぎを印象づけたり、橋の存在を遠くからも視認させる役割もある。/ 4. ポール灯の光源は、まち並みに合わせて統一するのが望ましい。電球色にするとあたたかい雰囲気になる。曇りガラスのようにシェードがかかっている灯具とすると、グレアが抑制されたやわらかい雰囲気の拡散光となる。

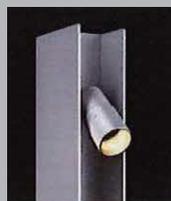
人通りの多い地域では、破損等を防ぎ、維持管理や安全のために、頑丈な器具を選定する。基礎に固定する設置方法としたり、座ったり足をかけやすい場所に置かないような工夫も必要。



格子状のデザインによって発光面をガードしている



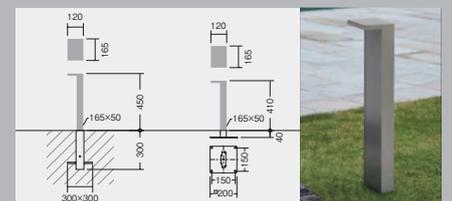
ベンチにもなるような強度で設計されている



スポットライトに触れにくいデザイン



華奢ではなく堅牢な形状の器具のイメージ



容易に動かせるスパイク式ではなく、埋め込み式やベースプレート式など、基礎に固定できる設置方法とする

鴨川

— 京都の「水辺」 —

鴨川は、京都の都市において、緑や水の自然を楽しむことのできる貴重な空間である。さらに、音楽や運動など、様々な人が思い思いのアクティビティを楽しむ場所でもある。夜においてもそうした風情を楽しむことができる、安心・安全な環境であることが求められる。



1. ランドマークを照らす際には、素材や形状を考慮する。三条大橋のような木造の繊細な橋であれば、欄干や手すりに沿った間接照明や、光源が歩行者の目に直接入らないよう計画された投光照明などが効果的である。周辺の光環境と明るさのバランスがとれるような調光制御を採用する。植物などへの影響を避けるため、時間帯や季節に応じて点灯時間を限定するオペレーションも考慮する。/ 2. 付随する道路照明は、ランドマークの魅力を阻害しないよう、ポラード照明やフットライトなどの低い位置の照明が望ましい。/ 3. 川床の照明は、低い色温度で統一されており、行燈のような拡散光があたたかみややわらかい雰囲気を作り出している。スポットライトのような灯具を用いる場合は、光源を川側に向けないよう配慮する。



照らし出された対象が川面へと映り込むことで、景観に奥行きが生まれる。華美に照らし出すのではなく、心地よい闇と光のバランスをとることで風情が生まれる。

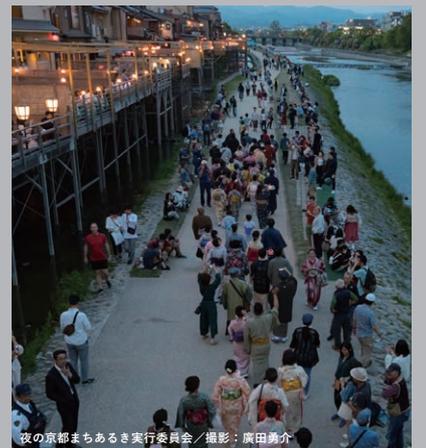
鴨川沿いには、散歩する人だけでなく、運動や音楽など様々なアクティビティを楽しむ人々が集まる。あかりを楽しむための夜のイベントが行われるときには、いつもと違った鴨川の夜景をみられることもある。



夜の京都まちあるき実行委員会／撮影：廣田勇介



夜の京都まちあるき実行委員会／撮影：廣田勇介



夜の京都まちあるき実行委員会／撮影：廣田勇介

文化ゾーン — 京都の「パブリックスペース」 —

特定の場所からの眺望だけでなく、エリアとしてどのような雰囲気をつくるかを考えることが景観では重要。夜は照明装置によって、見たいものと隠したいものをコントロールすることができる。ランドマークの特徴を活かしたライティングやそれらをつなぐ光環境も併せて考えると一層魅力が高まる。



文化施設の集積する京都という街で、印象的な光によってそれぞれのランドマークをつなぎ、夜の街の回遊性を高めることで、異なるアクティビティへの移行や交わりが生まれる。

このケーススタディで用いている照明手法について、詳しくは…

現代建築の照明…p.15 神社仏閣の照明…p.16 ランドマークの照明…p.17
広場の照明…p.18-19 樹木の照明…p.20-21 川辺の照明…p.22 幹線道路・市街地道路の照明…p.24-25

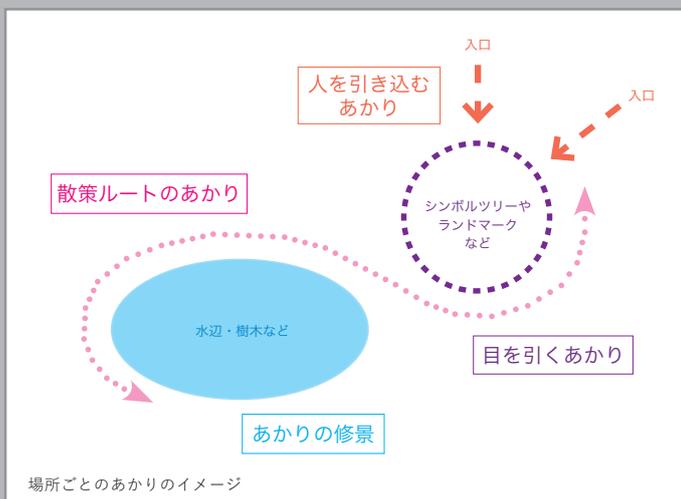


1. アプローチ部分はまぶしさのない低い位置の照明によって、社殿を引き立てるのに効果的な暗さを保っている。特徴的な朱色が映えるように、低い色温度の灯具で照らす。/ 2. 流れの穏やかな疏水への映り込みを意識して、水際の樹木や橋を照らす。/ 3. 軒先が連続的にやわらかくライトアップされ、周辺施設も含めて統一感のある光環境が整っている。/ 4. ファサードが繊細に照らし出され、柱型や庇の意匠が陰影のある表情を与えている。/ 5. 大鳥居の形を強調するような光のバランスで照らしている。遠くからもよく見通すことができ、期待感を高める。

公園

— 京都の「パブリックスペース」 —

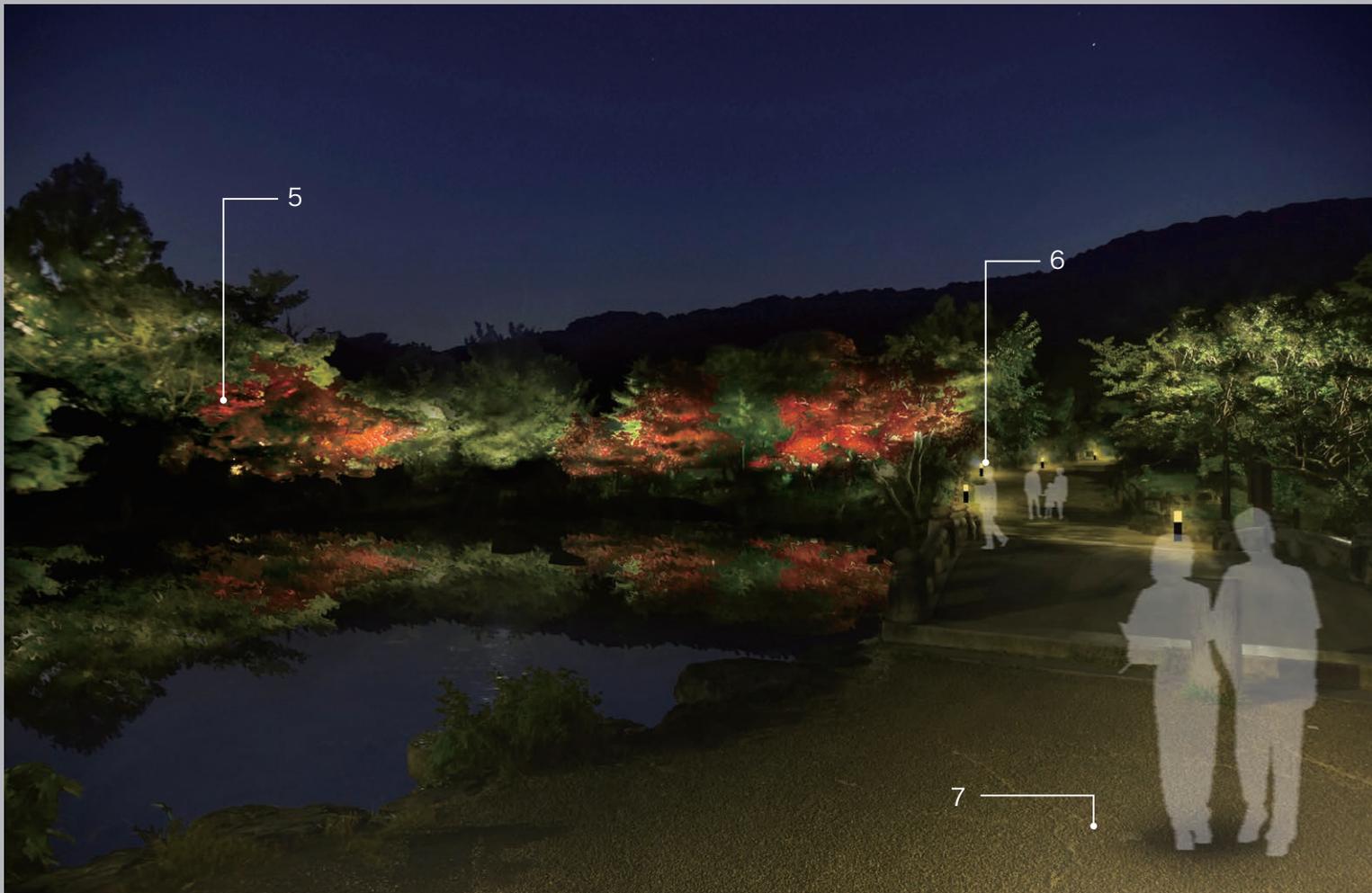
自然を眺めたり、散策して楽しむことのできる公園は、都市において貴重な空間である。誰もがいつでも憩うことができるように、夜も安心・安全な環境となるよう考慮することが重要である。



公園のように開けた広い空間では、場所ごとの性格を見極めて、その場所にあった光を計画することが重要である。

例えば…

- ・「人を引き込むあかり」= 入口となる箇所に、人々を迎え入れるようなあかりを設ける。
- ・「散策ルートにあかり」= 人が歩くルートを設定し、心地よく散策できる適切な明るさとリズム感のあるあかりを設ける。
- ・「目を引くあかり」= 見通しのよさと明るさ感を感じさせるよう、建物や樹木を照らすあかりを設ける。
- ・「あかりの修景」= 美しい景色をつくるための、水辺のあかりや樹木を照らすあかりを設ける。



1.曇りガラスのようにシェードがかかっている灯具とすると、グレアが抑制されたやわらかい雰囲気の出光となる。まぶしいあかりがあると対比によって、周囲が暗く感じられてしまう。上や横方向ではなく路面に光が集約されるよう適切に配光制御されたグレアのない灯具を用いることで、周辺の建物や夜空への光害も防げる。周辺樹木で光が遮られないよう注意。/ 2. 入口の路面に伸びる光を演出することで、人々を迎え入れるような雰囲気を演出することができる。/ 3. 路面は明るくならないが、鉛直面を照らすことで空間に明るさ感を与えることができる。/ 4. ベンチなどのストリートファニチャーと一体化した照明。

5. 水際の樹木を照らすことで、水面への映り込みも演出できる。季節限定のライトアップや、時期に応じたオペレーションも有効。/ 6. 人が通行する場所は、ポラード照明やフットライトなどで足元にリズムのあるあかりを配置することで人にやさしい歩行空間となる。/ 7. 開けた場所においては、人の表情が分かる程度の光だまりを設けることで、憩いの場の安心感を演出できる。